

もてなしの道づくり

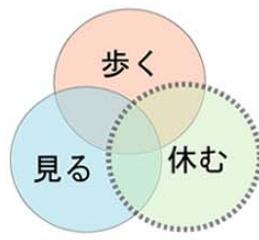
～鶴岡市温海地区かじか通りを対象として～

玉那霸綾子、田代展子
東京大学大学院 地域資源計画学研究室

もてなしの道づくり

観光地整備では、来訪者が楽しく、“歩く”・“見る”・“休む”ができるようにすることが重要である。しかし通常、建物修景や箱物づくりなど“見る”整備に比べ、“歩く”と“休む”を受け持つ道路の整備は不十分ことが多い。

歴史ある山形県鶴岡市温海温泉は、集客が伸び悩んでいた。それを打開すべく、温海川沿いのかじか通りにおいて、「もてなしの道づくり」をおこなった。地元の熱心な協力により実現しているが、計画・設計の考え方方は他の道路整備でも応用できると考え、そのポイントの整理をおこなった。



道のもてなし表現①

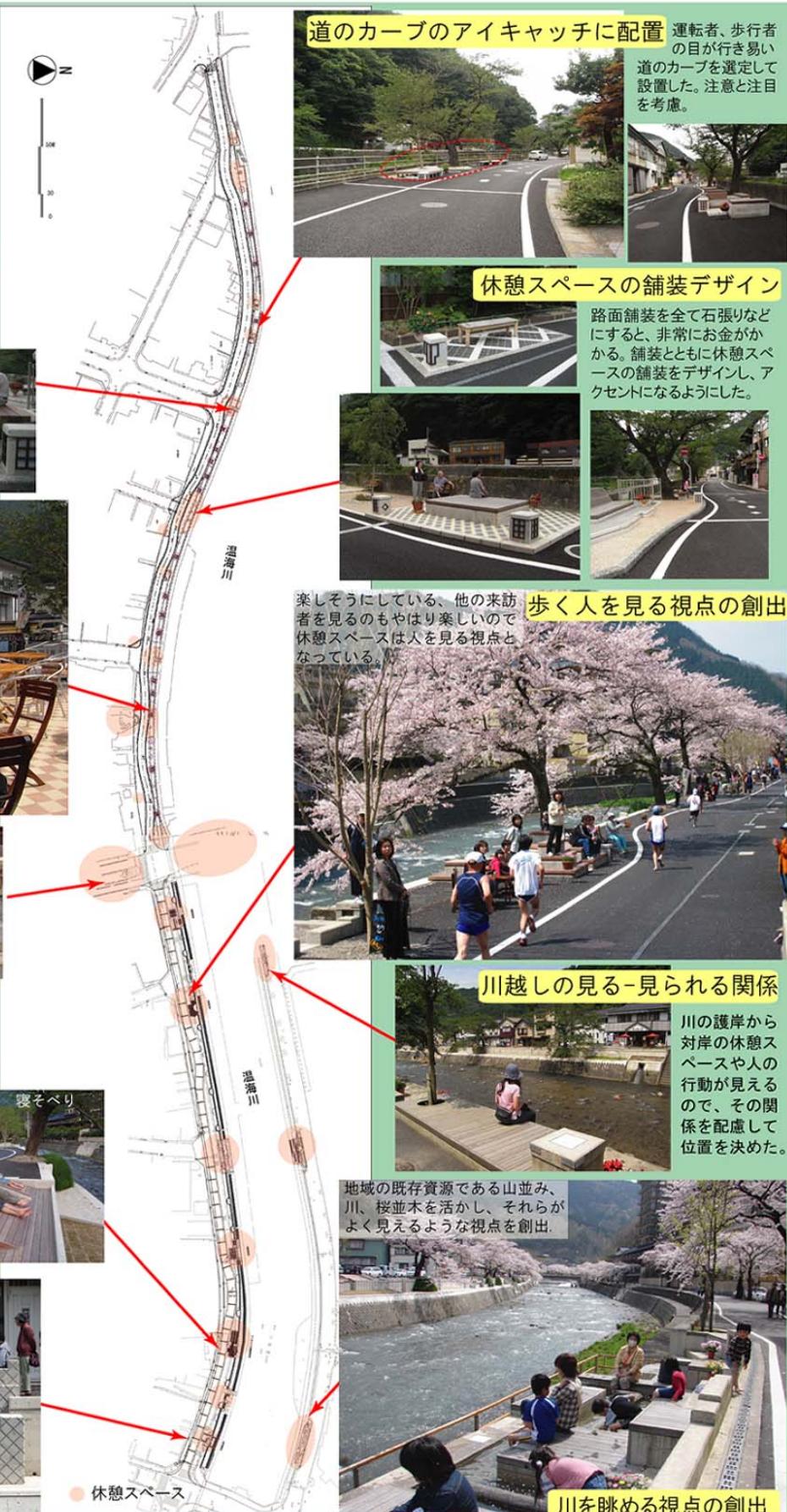
休憩スペースの設置

楽しくまちを歩いてもらうためには、休めることが重要である。まちが休憩スペースを用意すると、それはまちの「もてなし」になる。

そこで、かじか通り沿い600mに対し、休憩スペースを23箇所設置し、来訪者がいつでも休める場を創出した。空間・景観に対応させ、色々な種類の「休む」をデザインした。



休憩スペースを一段高くし、道と分節した。人は車や道行く人を気にせずに休むことが出来る。



運転者、歩行者の目が行き易い道のカーブを選定して設置した。注意と注目を考慮。



路面舗装を全て石張りなどにすると、非常にお金がかかる。舗装とともに休憩スペースの舗装をデザインし、アクセントになるようにした。



楽しそうにしている、他の来訪者を見るのもやはり楽しいので休憩スペースは人を見る視点となっている。



川の護岸から対岸の休憩スペースや人の行動が見えるので、その関係を配慮して位置を決めた。



地域の既存資源である山並み、川、桜並木を活かし、それらがよく見えるような視点を創出。



楽しそうにしている様子をお互いに見ることは楽しい(代理自我)。近くの休憩スペース同士の見えや関係に配慮して設計をおこなった。



温泉地で、温泉に触れられると、やはり嬉しい。形は四角ではなく、多くの人やグループが一緒に、楽しく過ごせよう工夫した



広いデッキ



対岸からの見えに配慮した目地デザイン

コンクリートの堅く、のっなりとした表面では、面白みがない。構造物は対岸からよく見えてるので、目地デザインを行った。



● 休憩スペース

道のもてなし表現②

あんべ湯

見て、居て、楽しいまちの拠点を作る（滞留拠点の創出）

休憩スペースの中でも、来訪者が集まる拠点となる場所をいくつか設定した。地域をゆっくりと楽しんでもらうために、足湯付きカフェ、道の中央の足湯、まちを見る視点となる橋上休憩スペースを作った。

使われていない公共施設を、
カフェとして再建。

誰でも使用できる無料の足湯
に浸かりながら、ゆったりと休憩できる。街路までテッキが続いており、その部分が歩く人のアイキャッチとなる。来訪者の利用を促している。



整備前



整備後



整備後



はつき橋

橋の上に歩行者のためのボードウォークとベンチを設置し、良い視点を創出。ベンチの向きは一つずつ異なり、利用者のシチュエーションによって座り方を選べる。



整備前



整備後

道の中央に足湯を作り、人が道の中心であることを印象付けた。温泉地の中でも目立つ位置にある。



道のもてなし表現③ 道のデザイン
道の魅力づくりもおこなった。
歩く人をもてなすために、線形を考え、舗装を
デザインした。

車がスピードを出しにくくなる

- ①一方通行にし、車の流れを制限する
- ②道(歩車分離線)を蛇行させることで、運転者に注意して運転してもらう



歩く人が見て楽しい舗装にする



地(アスファルト)に対して図になる舗装の図案、色を考えた。その際、場所によって配色や大きさを変化させ、動きをつけた。また大きすぎると、図として認識されないので、歩く人の目線を考え、ヒューマンスケールに配慮した。また横軸方向に対して図となる線状の帯を入れ、車両の速度を抑制することも狙った。



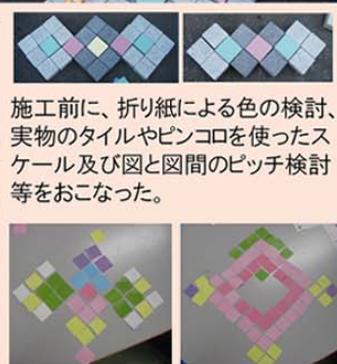
- ③休憩スペースを張り出し、車にプレッシャーを与える



整備前



整備後



施工前に、折り紙による色の検討、実物のタイルやピンコロを使ったスケール及び図と図間のピッチ検討等をおこなった。